

## アンティオキア教会と世界宣教

アンティオキア教会は、すでに学んだように、第1に、熱心な平信徒たちの伝道によって生み出された教会であり、第2に、礼拝とみ言葉の学びにおいてよく訓練された教会であり、そして第3に、与えることにおいて実に熱心な教会であった（使徒 11 : 19-30）。この教会は5人のすぐれた指導者たちの指導の下で、エルサレム教会にかわって異邦人に対する福音伝道・世界宣教の拠点として発展していった。

ここに記されている指導者集団の構成はユニークである。バルナバはキプロス、ルキオは北アフリカのキレネ出身のユダヤ人、シメオンはニゲルという別名を持ったおそらくアフリカ系のユダヤ人、マナエはヘロデ家との関係を持つ貴族出身で、サウロはかつて教会を迫害した元パリサイ派ユダヤ教ラビである。これだけの構成を見ただけでも、キリストの福音がいかに人を変革する神の力であるか、そのことを示す好例の一つである。

さまざまな土地から来た、さまざまな背景を持つ人々が、キリストの恵みによって全く変えられ、ひとつの町で一つとされ、共に心を合わせて、神の言葉すなわち福音の前進と教会の拡大のために働く。ここに力強く、またうれいしいキリストの教会の姿がある。

アンティオキアは当時のローマ帝国第3の大都会であり、あらゆる人種の人々が住んでいた国際都市であった。またパレスチナのすぐ外側にあり、そこからローマの世界が大きく開かれていく、福音宣教にとって格好の場所に位置した。この地に宣教の霊に燃えた教会ができたということは神の深い摂理であったというほかない。

さらに特筆すべきことは、アンティオキア教会の指導者たちの福音理解の深さと広さである。彼らは、キリストの福音が、一民族に限られたものではなく、すべての民族に与えられた神の救いの恵みであり、ユダヤ人だけでなく、世界的な広がりをもった神の恩寵の招きであるというこの福音の恩寵性、世界性、普遍性をよく理解していた。

従って、彼ら一同が「主に礼拝をささげ、断食をしているとき、聖霊によって、バルナバとサウロとを世界宣教へと送り出すよ」との啓示を受けたとき、彼らはこれを自分たちの教会に与えられた神からの使命と受け止め、教会にとってきわめて貴重な指導者であったバルナバとサウロを教会の職務から解き（3節「出発する」は「解放する」の意）彼らをただちに世界宣教へと送り出したのであった。

使徒言行録は第13章より第2部に入る。パウロ、バルナバを中心とする世界宣教の始まりの記録である。復活の主は、天に昇って行かれる前に弟子たちに言われた、「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、わたしの証人となるであろう」と（1:8 口語訳）。

その通り、エルサレムから始まった福音の恵みの大きなうねりはシリアの大都会アンティオキアにまで達し、そのアンティオキアからローマ帝国の各地へと拡大発展して行くことになるのである。私たちが小さい群れであるがこの福音宣教の尊い務めをこのワシントンの地で主から与えられていることを覚え、福音伝道と救霊の業に励みたいと思う。